

二〇一七年度
聖園女学院中学校 入学試験問題

国語

(時間 五十分)

〔注意事項〕

- 一、試験開始の合図があるまで中を開いてはいけません。
- 二、受験番号・氏名を解答用紙の定められた欄にかならず記入しなさい。
- 三、試験問題の印刷がはつきりしない場合には手をあげなさい。
- 四、解答は解答用紙に記入し解答用紙のみ提出しなさい。

四次

- 一、次の——線部をひらがなに直しなさい。
- | | | |
|------------------------|------------------------|----------------------------|
| (1) 旅行の <u>支度</u> をする。 | (2) 新記録を <u>樹立</u> する。 | (3) 祖父は私を <u>柔和</u> な目で見た。 |
| (4) 先生が <u>点呼</u> をとる。 | (5) 水を <u>貯</u> える。 | |

- 二、次の——線部を漢字に直しなさい。
- | | | |
|----------------------------|-------------------------------|------------------------------|
| (1) よく <u>じつ</u> の予定を確認する。 | (2) 事態は <u>しんこく</u> だ。 | (3) オリンピックの <u>ひょうし</u> ょう式。 |
| (4) <u>しゃこう</u> てきな人柄だ。 | (5) <u>誕生日</u> を <u>いわ</u> う。 | |

三、次の文章を読み、後の各問に答えなさい。

①「こんな自分、イヤだ」

そんな思いが込み上げてくることがあるだろう。だれにでもあることだ。今の自分に納得がいかない。

小さい頃は、そんなことはあまり思わなかったはずだ。もちろん、苦手なことはあっただろう。たとえば、球技が苦手だなど思ったり、引つ込み思案で友だちづきあいが下手な自分を意識したりすることもあっただろう。でも、自分が嫌いだとか、自分がイヤだなんて思うことはあまりなかった。それなのに、最近では、「自分がイヤだ」と思う。青年期になると、そんな思いを抱きがちだ。

自分がイヤだと思うようになるのは、自分がだらしなくなったり、ダメになってきたということではない。言ってみれば、見られている自分がダメになってきたのではなくて、見ている自分が成熟してきたのだ。自分を厳しい目で見るようになったために、自分の現状に納得できなくなったというわけだ。

今の自分にどこか納得がいけない。でも、どうすればよいのかがわからない。ここに産みの苦しみがある。どんな自分になったら納得できるのかが見えてこない。そこで、ますます自分が気になってくる。

そんな不全感を抱えた状態は、けっして気分の良いものではない。方向性を見つけて、こんな苦しい状態から何とか脱したい、早くスッキリしたいと思うかもしれない。でも、今の自分に納得がいけないからといって、自分を否定する必要はない。

②「自己の二重性」を思い出してみよう。見られている自分に対して納得のいかない見ている自分がいるわけだ。その見ている自分は、適当に流されている自分にも不満をもたなかった以前の自分と比べて、はるかに向上心に満ちた自分と言えるだろう。そんな自分は、けっして否定すべきものではない。むしろ肯定し、応援すべきなのではないだろうか。

「自分らしく生きよう」とよく言われる。これからは個性の時代だ。みんなと一緒なんて面白くないじゃないか。もっと自分らしく生きなきゃダメだという。

たしかに何でもみんなと同じなら自分である意味がない。自分で考えて生きていく感じにならない。ただみんなに合わせて生きるだけの人生なんて、とても魅力のあるものには思えない。

先生は「自分らしく」とか「個性」とか言うけど、今の学校でみんなと違うことばかり言ったりしていいたら、完全に浮いてしまう。みんな自分が浮かないかということばかりを気にしている。

たとえば、みんなの話題についていけなくなったら大変だと怖れている。そのため、ほんとうは興味のないテレビ番組を視たり、ユーチューブで共通のネタを仕込んだり、くだらないと思うネットの記事やブログを読んだり、ホンネを言えば「あんまりつきあいたくないなあ」と思う人たちのグループに属したりしている。

でも、ちょっと考えてみよう。この先の人生、ずーっと、周りのみんなに合わせることは考えて、周囲から浮かないように空気を読んで、自分のホンネを抑え続けなければならないとしたら、何だかつまらない人生に思えないだろうか。そんな A 気ない人生なんてイヤだなあと思えてこないだろうか。ふつうの神経なら、

欲求不満で爆発してしまうのではないか。

だったら、どうすればよいのだろう。

「好きなことをしよう」と言われることが多くなった。[※]キャリア教育というのが急に盛んになってきて、^⑤嫌々仕事をする人生なんてつまらない、そんなんじゃないじゃ仕事を楽しめないから、好きなことを仕事にしようなどと言われる。

そう言われても、好きなことって何だろうというところでもつまずいてしまう。そんなことはないだろうか。好きなことが何もないのかと言われれば、そんなことはない。野球が好きだ。ポプスが好きで、だれだれのファンだ。鉄道が好きで、鉄ちゃんのネットにはまっている。だからといって、それが仕事になるとは思えない。あまりに^⑥非現実的だ。どうも大人たちの言うことはメチャクチャだ。僕は、年齢的にいえばとんでもなく大人なんだけど、つくづくそう思ってしまう。

好きなことで仕事になりそうなことって何だろうか。そんなことをいくら考えたって無駄だ。それがほんとうに好きかなんて、本気で打ち込んでみないとわからないからだ。部活だって趣味だってそうだろう。面白そうだなって思ってから始めても、やっているうちに「ちょっと違うな」「自分には無理」っていう思いが込み上げてきて、結局中途半端にやめてしまう。そんなのは、じつによくあることだ。

それに、どんな仕事だって、やってみると意外に面白いと思うことがある。はじめはできなかったことができるようになってくると、何となく楽しくなってくる。好きなことを仕事にしないと仕事を楽しめないなんて、そんなのは大きな勘違いだ。

「自分にしかできないことをしよう」なんて言われることもある。そんなことができたらかッコいいなとだれもが思うはずだ。自分もそうしたいと思うだろう。思うまではいいのだが、そこから先に進めない。

「自分にしかできないこと」をしたい。それは、本気でそう思う。それなのに全然先に進めない。なぜなのか。それは、「自分にしかできないこと」というのが、いったい何なのかかわからないからだ。まったく見当もつかない。

それは当然だ。まだ実社会に出ていないし、人生の序盤じよばんを生きているだけなのだから。自分にできることが何なのか。できないことは何なのか。そんなことは、いろいろやってみないうちからわかるわけがない。この先さまざまな経験をすることで、「自分にできること」や「自分にはできないこと」が見えてくる。また「自分ができること」が増えてくる。そうしているうちに「自分がやりたいこと」や「自分にしかできないこと」が徐々に見えてくるものだ。^⑦焦る必要はない。

というよりも、今からそんなことまでわかっただら、人生の謎解きなぞができちゃったみたいで、この先の人生のワクワク感がなくなり、つまらない人生になってしまうのではないか。もう少しじっくり楽しんでもいいだろう。

（榎本博明『自分らしさ』って何だろう？ 自分と向き合う心理学』より。一部改変）

（語注）※ キャリア……職業。

(問一) — 線①「こんな自分、イヤだ」とありますが、その理由を筆者はどのように考えたのですか。最も適当なものの中から一つ選び、記号で答えなさい。

(ア) 友だちづきあいがとても下手になったから。

(イ) 自分を厳しい目で見るようになったから。

(ウ) 成長して自分の生活のだらしなさに気づいたから。

(エ) 苦手なことがたくさんあることに気づいたから。

(問二) — 線②「自己の二重性」とは、どのようなことですか。次の空欄に当てはまる言葉をここより前の文中からそれぞれ探し、書き抜きなさい。

自分の中に ア と イ があること。

(問三) — 線③「とても」がかかっている言葉を次のの中から一つ選び、記号で答えなさい。

(ア) 魅力の (イ) ある (ウ) ものには (エ) 思えない

(問四) — 線④「としたら」を用いて、主語・述語のとのった短文を作りなさい。

(問五) A に入る言葉として最も適当なものを次のの中から一つ選び、記号で答えなさい。

(ア) 人 (イ) 何 (ウ) 本 (エ) 味 (オ) 元

(問六) — 線⑤「嫌々……仕事にしよう」とありますが、これについて筆者はどのように考えていますか。文中から四十字以内で探し、始めと終わりの五字を書き抜きなさい。

(問七) — 線⑥「非現実」のように「非」をつけることができないう言葉を次のの中から一つ選び、記号で答えなさい。

(ア) 常識 (イ) 公開 (ウ) 誠実 (エ) 金属

(問八) — 線⑦「焦る必要はない」とありますが、なぜですか。説明しなさい。

(問九) 本文の内容として最も適当なものを次のの中から一つ選び、記号で答えなさい。

(ア) 好きなことがほんとうに好きかどうかは、本気で打ち込んでみることでわかるようになるものだ。

(イ) 好きなことがほんとうに好きかどうかは、さまざまな趣味を持つことでわかるようになるものだ。

(ウ) 好きなことがほんとうに好きかどうかは、周囲とのかかわりの中でわかるようになるものだ。

(エ) 好きなことがほんとうに好きかどうかは、自分の個性を大切にしていく中でわかるようになるものだ。

四、次の文章を読み、後の各問に答えなさい。

本文までのあらすじ 「杏里^{あんり}は、友人関係に悩んでいた。」

「杏里」

① 耳元^{みみもと}で名前を呼ばれた。驚いた。慌てて立ち上がる。イスがガタンと大きな音をたてて、後ろに倒れた。

「まあ」

母の加奈子が目を見張り、口を丸く開けて、倒れたイスを見やった。それから、くすりと笑う。

「どうしちゃったの。呼んだだけなのに、そんなにびっくりして。こっちの方が驚くじゃない」

「あ……うん、ちょっと考えごと、してたから」

イスを起こし、杏里は笑みをうかべてみる。

無理してるな。

そう思った。

頬の辺りが滑らかに動かない。無理して笑おうとするから、硬くこわばってしまったのだ。こんな無理やりな笑い方、もう、したくない。ううん、もう、しない。絶対に、しない。

芦藁市に引越してきた日、初めて芦藁第一中学に足を踏み入れた日、そう決めた。自分で自分に約束した^②。心を隠して、周りに適当にあわせて、頬の筋肉がかちかちになるまで無理な笑いを浮かべて……そういうのもう、やめよう。そんな笑い方をしてみんなと騒ぐより、騒いだ後で疲れたな、とため息をつくより、ため息をついた自分を少し惨めに感じるより、一人でいよう。心にそむかないように、笑ったり、泣いたりしよう。決めたのに、なかなか、上手くいかない。今もまた、窮屈な笑い方をしていた。

何を考えていたのと、加奈子は尋ねなかった。

ほっとする。

何を考えていたのと尋ねられたら、「別に……」とあいまいな答えを返さなければならなかった。

こういうとき、母のさっぱりした気性をありがたいと思うのだ。

あなたはあなた、わたしはわたし。母娘であっても、いや、母娘だからこそ、言えないことや聞いてはいけないことがある。

加奈子はそう割り切っているようで、よほどのことがない限り、執拗に問い質そうとはしない。前の街にいたころは、どことなく頼りなく、すぐに杏里に「ねえ、どうしよう」と相談をすることも多かったのに、このころ、それもぐっと減った。

芦藁に来て、一番変わったのは加奈子かもしれない。

たくましく、強くなった。ちよっぴりだけきれいになった。

「おまえのお母さん、ずいぶんと凍々しいね」

一週間ほど前になるだろうか、祖母の菊枝がぐすくす笑いながらそう言った。季節が逆戻りしたような風の寒い日だったけれど、ガラス戸をびたりと閉めた祖母の部屋は陽射しのぬくもりだけが満ちて、とても心地よかった。

一時は目に見えて回復していた祖母の体力は、このところまた弱り始めて、寝たり起きたりを繰り返している。その日は、調子が良かったのだろう。布団の上上半身を起こし、庭木の青葉に目を細めたりしていた。

「それ、男っぽいってこと？」

「凍々しいは、凍々しいさ」

凍々しいという言い方には、あまりなじみがない。ふだん、めったに使わない言葉だ。でも、祖母が母をほめていることは、よく理解できた。祖母は亡くなった父の母親だ。だから、菊枝と加奈子は血のつながらない間柄になる。その二人が、多少は遠慮したり、ぎくしゃくしながら、相手を大切に思い、労りあいながら暮らしている。それも理解できた。

「母さん、おばあちゃんの所に来たら変わったかな」

「そうだねえ」

「けど、母さん、もう四十だよ。そんな歳なのに変わったたりするのかな」

杏里にとって、四十という歳ははるか遠くのものだ。四十の大人が自分と同じように、悩んだり、迷ったりしながら変わっていくなんて、信じられない。

菊枝が光の中でふんわりと笑った。

「杏里、人はね、幾つになっても変えられるものなんだよ。良くも悪くも、凍々しくも卑しくも、変わるものさ。変えられるものなんだよ」

「そうなの」
「そうとも」

菊枝はまた、ふんわりと笑った。あんまりふんわりとした笑顔だったから、杏里もつられて微笑んでいた。そうか、人は幾つになっても変わる、変わるものなんだ。胸の中でつぶやくと、胸の中もふんわりと軽くなった。

(あさのあつこ『二年四組の窓から』より。一部改変)

(語注) ※ 執拗……しつこいこと。

字数制限のあるときには、句読点や記号は一字と数えなさい。

(問一) — 線①「耳元」とありますが、同じように「元」という形で使うことができない漢字を次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

(ア) 口 (イ) 手 (ウ) 目 (エ) 足 (オ) 腹

(問二) — 線②「約束した」とありますが、何を約束したのですか。次の空欄に当てはまる言葉を文中から探し、

ア は二字で、イ は五字で書き抜きなさい。

アの心にイ こと。

(問三) — 線③「ほっとする」の意味を変えないで、「する」に続くように漢字二字で言い換えなさい。

(問四) — 線④「一番変わったのは加奈子かもしれない」とありますが、どのように変わったと杏里は考えていますか。変化後の加奈子の様子を四十字以内で説明しなさい。

(問五) — 線⑤「弱」の総画数を漢数字で答えなさい。

(問六) — 線⑥「庭木の青葉に目を細め(る)」とはどういうことですか。最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

(ア) もっと庭木の世話もしたいのにと、残念がっているということ。

(イ) 庭の木の生長が早いので、意外に思っているということ。

(ウ) 葉の青さが鮮やかすぎて、目にしみて不快だということ。

(エ) 庭の木を見るのがうれしくて、喜んでいるということ。

(問七) — 線⑦「だ」と同じ意味・用法のものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

(ア) 雪が降って村はとも静かだ。 (イ) 明日は楽しみにしていた遠足の日だ。

(ウ) 家の中にはだれもいないようだ。 (エ) 図書館で借りた本はもう読んだ。

(問八) — 線⑧「胸の中もふんわりと軽くなった」とありますが、なぜですか。説明しなさい。

(問九) 本文の内容として適当でないものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

(ア) 加奈子は夫をすでに亡くしている。 (イ) 菊枝と加奈子と杏里は一緒に暮らしている。

(ウ) 菊枝の息子は加奈子の父である。 (エ) 杏里は芦藁第一中学に転校してきた生徒である。

問題は、ここで終わりです。